

## 史 談

2009 (H21) 8・15

## ■ 文化財を訪ねて

一直江兼続ゆかりの地を巡りますー  
早めにお申し込みください。

- 1、日時 9月24日 (木)  
午前8時15分 役場前に集合  
午後4時00分 帰る予定です。
- 2、見学場所 米沢市 (上杉博物館、林泉寺、西明寺、直江石堤、帯刀堰など)
- 3、講師 米沢市文化課長 村野隆男氏
- 4、参加費 2000円  
当日持参してください
- 5、定員 25人
- 6、締切り 9月11日 (金)  
定員になりしだい締切りになります。
- 7、申し込み・問い合わせ  
教育委員会文化振興係 船山まで  
85-6146
- 8、主催 白鷹町史談会・教育委員会

## ■ 会報などの配布の方法について

先頃開かれた役員会で、この会報・その他の文書配布の方法について話し合われました。いままではすべて会員個人あてに事務局から郵送されていたわけですが、**経費節減**と、**会員のつながりをより強くしたい**という考えから、地区の人に連絡員になっていただき、会報・その他の文書を手渡しで届けてもらってはどうか、ということになりました。

今回、その原案を同封いたしましたので、都合のある方やご意見のある方は、遠慮なく史談会の事務局までご連絡ください。手直した上で早急に実施したいと考えています。

なお、連絡員を頼まれた方には恐縮ですが、自分たちの会でもありますので、これからの円滑な運営のためにもよろしくご協力をいただきたいと思います。(史談会会長 江口儀雄)

## ■ 諏訪堰を歩く 3 守谷英一

## 5 森沢サイホン

森上の集落を抜けると、間もなく最上川に向かって流れる川にぶつかる。諏訪堰はこの川を横切って、延びている。

どのようにして川を横断しているのかというと、サイホンの原理である。

この川の手前で、私は一瞬、諏訪堰を見失ってしまった。集落を抜け、また国道287号線の道路に沿って流れていた堰の水は、四角いコンクリートの固まりの中に吸い込まれ、消えてしまったからだ。



上部に、水門を上げ下げするハンドルのついたコンクリートの固まりの下で、堰の水は垂直の穴の中に吸い込まれて行く。一体水はどこに行くのだろうと見回していると、対岸に同じようなコンクリートの固まりを発見した。急いでいって見ると、そのコンクリートの下から水が流れ出ている。ようやく合点がいった。いつかテレビで見た、古代ローマ帝国の水道が谷を横断する仕掛けと同様である。諏訪堰の水は、森集落を東西に流れる森沢川の底をサイホンの原理で潜って横断している。できた当初からこのような仕掛けがなされていたのか、それはわからないが、あり得ることなのかもしれない。

## 6 穴堰

森集落の北は穴堰と呼ばれる集落である。森沢サイホンを潜って間もなく、諏訪堰はまた国道沿いから離れて、細い道沿いに走る。

この道はそんなに長くないが歩いていて気持ちのよい道だ。堰の岸辺に写真のような建造物を

発見した。何とも不思議な建造物であるが、私たちが子どもの頃はあちらこちらで見かけたものだ。子どもたちは、横に渡した木に腰をかけたり、あるいは鉄棒のように逆上がりをして遊んだりしていた。大体、集落に一つずつぐらいあったように思う。もっとも私が子どもの頃には町場には存在せずに、周辺の集落で、しかも街道沿いの集落のはずれにあったように記憶している。



これは確か馬の蹄を削ったり、蹄鉄を付け替えたりするための施設だと思う。「馬の爪切り場」と私たちは呼んでいた。ここのはきちんと整備され、きれいになっていて、まだ使われているかのようであった。

さて、この集落は穴堰（あなぜき）と呼ばれているが、そう呼ばれているのは、諏訪堰が小さな丘をトンネルで越えているからである。堰が穴を潜っているのだ。



この穴堰は、諏訪堰開削当初にはなく、堰は現在よりも西側の亀ヶ森の方を回っていたらしい。ところがそれが洪水のために削り取られたため、東側の小山を掘り抜くことを考えたようである。

穴堰は、現在はコンクリートで固められたトンネルになって、当然機械で掘られたのだろうが、

当初は人力によって掘られたようである。『白鷹町史』によると、寛文7（1667）年に穴堰を掘ったのは、金掘り業をしていた草岡村の勘三郎というもので、一日0.5匁の日当で浅立堰54間（約97メートル）と広野堰54間（約97メートル）の2本を掘ったという。合計約200メートルのトンネルを人力だけで掘る苦労はとて大変なものであったろう。そうまでして水を引くことがこの地域の稲作拡大のためには必要だった。

## ■ ウルシかぶれ 6

梅雨どきになって山野に枝葉を広げている木に「シンジュ」という木がある。別名「ニワウルシ」ともいっているが、ウルシの仲間ではないからかぶれることはない。左右対称の葉のつきかたに特徴があるからすぐにわかる。葉を揉むと独特の臭いがあるが、いい臭いとも思えない。成長が早く、天にも届く勢いで伸びるところから「天の木」になり、やがて「神の木」になる。「神樹」という表記もそのあたりが元らしい。

むろん外来のもので、明治のはじめにオーストリアから入ってきたという。戦前は桑のかわりにカイコの餌にもされたと聞いたが、蚕がこの葉を食しているところは見たことがない。雷除けになるといういわれは何からきたものだろう。ハセギにしたものか、田の畔などにも植えられていた。

一方では悪木で不要な木とされ、字も「樗」の字があてられている。明治には高山樗牛という作家もいた。木は雌雄が別らしく、夏の前に上を向いた白い花らしいものを見ることがある。実が川に流されて運ばれるのか、風で飛ぶのか、川のほとりによく見かける木である。

また、山野でこの時期に葉がウルシと似ている木にキハダがある。このあたりではキワダと発音している。木の皮の内側が黄色いことからこの名がついたというのだが、これはミカンの仲間である。口にすると苦味が強く、昔から胃の生薬として珍重されてきた。またその苦味の成分を乾燥させたものを「陀羅尼助」といい、寺の僧が修行中に眠気をもよおした時、口にしたりするともいう。